

吉野作造対浪人会の立会演説会

論争の発端から終結までの過程分析

愛知県立大学外国語学部ヨーロッパ学科ドイツ語圏専攻
今野 元

序論 描かれざる事件

二〇一八年(平成三〇年)十一月二三日は、吉野作造と浪人会との立会演説会から百周年に当たる。この事件は「大正デモクラシー」の象徴として、吉野の「憲政の本義を説いて其有終の美を爲すの途を論ず」発表(一九一六年一月)や「米騒動」(一九一八年夏)と共に記憶されてきた。従来の通説では、暴力も辞さない浪人会の弁士らを、吉野が快刀乱麻の弁舌で粉碎し、聴衆は感激してデモクラシー万歳の凱歌を上げたことになっている¹。同世代の下村宏(朝日新聞社、のち情報局総裁)曰く「博士は従容として田中舍身居士佐々木蒙古王等と應酬し理路井然じゆんじゆんとおだやかに説き去り説き來り、博士は満場の喝采をあびて立派な判定勝ちとなつた²。」

だがこの立会演説会は、日本近代史上の重大事件であるにも拘らず、従来その起源及び経緯を検討されたことが一度もなかった。先行研究は専ら吉野作造側の状況認識を踏襲しており、多少の新聞報道などを加味することもあるが、浪人会側の状況認識を顧慮しない点では一貫している。このため、同会が後述のように最後に両者が互いの愛国心を認め合い、参加者一同で天皇陛下万歳を三唱して終了した理由が理解できない状態が続いている。

この立会演説会に関する主な史料には次のものがある。まず吉野作造側の主張として引用されてきたのは、(一)吉野作造日記の記述、(二)吉野派学生の記録である。(一)の吉野日記は岩波書店

¹ 先行研究の多くはこの有名な事件に触れつつ深入りしないが、多少詳しい叙述をしている研究として以下のものを挙げることができる。田中惣五郎『吉野作造』、未来社、昭和三三年、二一九—二三〇頁；ねずまさし『日本現代史』第三卷、三一書房、昭和四一年、一〇—一四頁；松尾尊兌『大正デモクラシー』、岩波書店、昭和四九年、一六六頁；鹿野政直『大正デモクラシー』、小学館、昭和五一年、二八六—二八七頁；松本三之介『吉野作造』、東京大学出版会、平成二〇年、一四六—一五〇頁。ただ最近では、この立会演説会が両当事者の和解で終わったとの報道に注意を促す指摘もある(内山秀夫「黎明会前の吉野作造」、『吉野作造選集(第一四卷)月報一二』、岩波書店、平成八年、二—五頁；田澤晴子『吉野作造』、ミネルヴァ書房、平成八年、一二七頁；成田龍一『大正デモクラシー』、岩波書店、平成一九年、一〇五—一〇六頁；奥田浩司「大正デモクラシーにおける抵抗文化の形成についての研究——天皇制イデオロギーと知識人の亀裂」(平成二五年度名古屋大学大学院文学研究科学位(課程博士)申請論文(未公刊))、四—五頁。)]『大正ニュース事典』第三卷は、十一月一六日の会合で吉野が浪人会に謝ったという『東京日日新聞』の記事を転載している(毎日コミュニケーションズ、昭和六二年、七一—七四頁)。同時代には、吉野寄りの論調ながら両者の「紳士的の解決」や『大阪朝日新聞』関係者の大規模退社を指摘する文献もあった(芳賀榮造『明治大正筆禍史』、四紅社、大正一三年、一七二—一七四頁)。だがいずれの叙述も、速記録や浪人会側の状況認識を加味した叙述にはなっていない。

² 下村海南『日本はどうなる』、池田書店、昭和二八年、一九九頁。

版『吉野作造選集』³で初公開されたものだが、吉野家と交流のあった田中惣五郎が伝記研究『吉野作造』で援用したことから、予てからその存在が知られていた。だがこの日記は元来公開を予定したのではなく、『選集』刊行時に編集部が吉野家に懇願して、内容を一部削除の上公表したものであり、原本は非公開のままである。また個人の非公開の独白あるいは備忘録に過ぎない以上、吉野にはそこで事実には忠実な記述をする義務もなく、むしろ自分本位の描き方をするのが自然だろう。この事件に関する吉野日記の記述はきわめて簡潔である。(二)は労働運動家、衆議院議員(日本社会党右派)の菊川忠雄(一九〇一年—一九五四年)がまとめた『學生社會運動史』⁴である。同書は学生の動きや演説会の様子を詳述しているが、吉野や学生たちの英雄視が著しく、浪人会の動きは分からない。また菊川はこの演説会当時まだ第一高等学校にすら入学しておらず、ここで描かれている状況は(多分に脚色の入った)聞き書きだと推測される。(三)新聞報道では、『報知新聞』、『東京日日新聞』、『都新聞』、『萬朝報』などが立会演説会に関して報じている。だがその記事は小規模で、そこから論争経緯の情報を引き出すのは難しい。これに対し従来加味されてこなかった浪人会の史料とは、(四)立会演説会に至る過程での吉野との応酬の記録(柳坡「法學博士吉野作造氏訪問録」⁵／浪人會同人「浪人會對吉野博士立會演説始末」⁶／明鏡生「浪人會對吉野博士立會演説會場外所見」⁷)、(五)立会演説会の速記録(佃速記事務所「浪人會對吉野博士國體問題立會演説會速記録」⁸)で、いずれも黒龍会系雑誌『亞細亞時論』に掲載されたものである。前者は、当事者の自己主張という面では、吉野の日記や学生の記録と同じであるが、速記者を同行させていたらしく、一語一句詳細な記述になっている。この記録を読まないで、後述の速記録における発言の含意も理解できない。(五)の速記録を刊行したのは浪人会だが、作成したのは外部業者である。同主催者の佃與次郎(一八六六年—一九三一年)は佃式速記術の創始者で、東京日日新聞社や衆議院速記課での勤務を経て、朝日新聞社の速記顧問を務めている⁹。この速記録は、(一)、(二)、(三)、(四)のどれよりも信憑性が高い。後述のように吉野作造は、自分の言い分が誤って報道されたと感じたときには抗議しているが、(四)、(五)の刊行に吉野が抗議した形跡はない。

本人と論敵との意見交換が追跡できるこの立会演説会は、吉野作造研究には欠かせない考察対象であり、日本近代史にとっても重要な関心事である。本論はこの研究上の穴を埋めようとする試みである。

³ 『吉野作造選集一四』、岩波書店、平成八年。

⁴ 菊川忠雄『學生社會運動史』、中央公論社、昭和六年。吉野側関係者の叙述には他にも以下のものがある。麻生久伝刊行委員会編『麻生久傳』、昭和三三年、九三—九五頁；三宅正一『幾山河を越えて』、恒文社、昭和四二年(再版：大空社、平成一二年)、一一—一八頁；住谷悦治他『大正デモクラシーの思想』、芳賀書店、昭和四二年、一一九—一二一頁。

⁵ 『亞細亞時論』、大正七年一二月、六七—七七頁。以下「訪問録」と表記。

⁶ 『亞細亞時論』、大正八年一月、一五九—一九〇頁。以下「始末」と表記。

⁷ 『亞細亞時論』、大正八年一月、一九一—一九六頁。以下「場外所見」と表記。

⁸ 佃速記事務所「浪人會對吉野博士國體問題立會演説會速記録」、『亞細亞時論』、大正八年二月、特一—特五三頁。以下「速記録」と表記。

⁹ 『20世紀日本人名辞典 そ〜わ』、紀伊国屋書店、平成一六年、一六三六頁。

一. 政治史的前提——吉野作造の擡頭と浪人会の出現

第一次世界戦争は日本にとっても歴史的転換点となった。ハプスブルク帝国とセルビア王国との間の地域紛争は、一瞬にして独逸(中欧列強側)対露仏英(協商国側)の大戦争に発展し、やがて前者にはトルコとブルガリア、後者にはイタリアとアメリカ合衆国が加勢した。日本も日英同盟を理由に協商国側で参戦し、ドイツ租借地だった膠州湾を占領した。日本は日清戦争、日露戦争に続く日独戦争で三度目の勝利を挙げ、大陸進出の新たな契機を得たが、それは日中・日米対立の本格的開始をも意味した。また各国とも総力戦に突入したことで、従来から顕在化していた民主化や平等化が一層の進展を見ることとなった。ロシア革命は君主制崩壊、世界初の社会主義政権成立という結果を招き、その衝撃は劣勢にあった中欧列強諸国を直撃した。戦争への関与が小さかった極東の日本にも、その影響が及んでくることになる。

ここで日本言論界の寵児となったのが吉野作造である。生来の言論人だった吉野は、学生時代から『新人』に寄稿し、洋行から帰り東京帝国大学教授(政治史)に就任した頃から、『中央公論』に登場した。「東京帝國大學法科大學教授、法學博士吉野作造先生は、其高雅なる品性と深遠なる學殖とを以て、今や學生間に於ける欽慕崇拜の焦點たり。其一度出て、時事を論ずるや、卓抜の識、透徹の論、識者をして驚倒せしむ¹⁰。」一部同僚からは、吉野が真面目な研究を怠って言論界で有頂天になっているとの苦言も呈されたが¹¹、学者は「象牙の塔」を出て民衆に語るべきだ、大学を「單なる死學者の養老院」にするな、言論人吉野への批判など嫉妬に過ぎないという外部の声に圧倒された¹²。吉野の政治的信念は、英米に体现された西洋的＝普遍的な知的潮流への日本の順応が、日本の名誉ある発展につながるというもので、同世代の佐々木惣一などとも一致している¹³。

吉野作造が人気を博した契機は日独戦争の道義的解釈だった。当時の吉野にとってこの戦争は、帝国主義列強の権力闘争ではなく、正義の諸国がならず者国家を打倒する「正戦」だった。吉野は日独戦争を「獨逸膺懲の戦争」と呼び、道義的に正しいものだと言った¹⁴。吉野には、同じ論理で日露戦争を正当化した過去があった¹⁵。第一次世界戦争に際し吉野は、英仏を「えらい」国として称揚¹⁶、かつて酷評したロシアすら褒め称え¹⁷、アメリカ合衆国参戦の「文明的意義」を説き¹⁸、ドイツ帝国を俗悪で下劣な国として、言葉を尽くして非難した¹⁹。吉野のドイツ帝国批判は、国内の官界や軍部など

¹⁰ 『中央公論』、大正五年六月、前付一の七。

¹¹ 上杉愼吉「我が憲政の根本義」、『中央公論』、大正五年三月、公論四五—四六頁。

¹² 井口孝親「新政論家批判」、『中央公論』、大正八年一月、説苑一二六頁；鐵拳禪「吉野甫」「法博吉野作造論」、『中央公論』、大正五年六月、説苑六三—六九頁。

¹³ 佐々木惣一『立憲非立憲』、講談社、平成二八年、一五頁(原本は大正七年刊)。

¹⁴ 吉野作造「日米共同宣言の解説及び批判」、『中央公論』、大正六年一二月、公論四一頁。

¹⁵ 吉野作造「露國の敗北は世界平和の基也」、『新人』、明治三七年三月、二五—二六頁。

¹⁶ 吉野作造「國際競争場裡に於ける最後の勝利」、『新人』、大正三年一二月、二九頁；同「白耳義と佛蘭西の政黨」、『六合雜誌』、大正三年一二月、二二—三〇頁。

¹⁷ 吉野作造「日露益々親和」、『中央公論』、大正五年二月、公論一六頁；同「歐洲戦局の近状」、『新人』、大正五年三月、七五頁。

¹⁸ 吉野作造「米國参戦の文明的意義」、『中央公論』、大正六年五月、時論九二—九五頁。

¹⁹ 吉野作造「獨逸の國民性」、『新女界』、大正三年一二月、五七—六四頁。

に見られる「獨逸カブレ」との対決でもあった²⁰。

外政論で有名になった吉野作造は、その延長線上で徐々に内政上の「民本主義」を唱道するに至るが、それはデモクラシーと(特に日本の)君主制とが矛盾しないという信念の表現でもあった。これは検閲対策の方便ではなく、年来の個人的確信である。吉野はすでに中学校時代、劣勢の南朝のために奮戦した菊池氏の孤忠を寒桜に譬えた作文を書いている²¹。吉野はまた日清戦争に際しても、「荒野原太刀を枕のまどろみて響のいさをや夢よ見る覽」(「軍人ゆめ」)、「唐の荒野に生へし醜草も靡くや君の御稜威の風に」(「皇徳及邊境」)、「故郷の妻子が書きしたま章か月をかすむる雁金の跡」(「夜營」)、「露霜におきふすも君の爲なれや大和男子の何いとふべき」(同上)と詠んで、日本軍将兵の勤王精神を称えた²²。更に吉野は、私財を投じて順徳天皇陵を修復した曾根吉正(佐渡奉行)を称讃している²³。留学先でバーデン大公夫妻やドイツ皇帝夫妻が市民に喝采されるのを見た吉野は、それと同じように日本皇室が日本国民に近い存在になることを望み、また折から届いた明治天皇崩御の報に肩を落とした²⁴。

大正天皇即位礼(一九一五年)への吉野作造の賀詞も流麗である。「萬世一系坤輿に比類なき芽出度皇統を受けさせ給へる我が聰明仁孝なる 今上陛下は人皇第二百二十二代の帝として近く將に即位の大禮を擧させられんとす、恭しく惟みるに神武大和橿原に於て帝位に即き給ひてより茲に二千五百七十三年、此間大古一千年は漠として多く知る可らざるも神功皇后の三韓を征伐せらるゝあり、仁徳帝の民の疾苦を察し三年の御調を止められ高き屋の御歌をよみて仁政の範を垂れ給へるあり、下りて奈良、平安朝に至れば大に大陸の文物を輸入せられ彼が僧侶、學者、工作者の歸化人を採用せられ、而して聖徳太子の憲法制定、桓武帝の遷都、天智帝の大化新政等勳業最も顯著なり、此より以降政權多くは閥族に歸し、藤原氏の專横時代を経て、鎌倉時代に入りて更に室町時代を過ぎて天正年間に至れば信長勤王を以て起り秀吉亦た朝廷を尊奉して天下の亂を鎮定せり、徳川氏に至り儒學大に興り、殊に其中葉以後國學開けてより大義名分の説益々明なりしが明治天皇に至り維新の大業成り外、開國の國是を立て内、立憲政體の基を定められ、日清日露の戦役に由り皇威を世界に輝かせ給へり、今帝陛下今この大統を継ぎ世界歡呼の裡に大典を擧げさせられ[ん]とす、吾等同人六千萬の同胞と共に謹んで寶祚の萬歳を祝し奉る²⁵」

終戦直後にも吉野作造はこう喝破している。「我日本の國體には實に萬國に誇るべきものがある。吾々は其根本義を合理的に宣明して、國體の本義に關する不動の確信を國民に与へたい。所謂舊式の國學者などの唱ふるやうに神話的説明では到底今日の青年を動かす事は出来ない。更に進んで吾々は、今日の世界の大勢に於ける日本の地位を明かにし、何を以て世界人文の進歩に貢献す

²⁰ 吉野作造「水野博士「靜感」を讀む」、『國家學會雜誌』、大正五年四月、七二二—七二三頁；同「時事概言四則」、『中央公論』、大正七年八月、九八頁。

²¹ 宮城県立仙台第一高等学校編『仙台一高六十周年史』、宮城県立仙台第一高等学校同窓会、昭和三十一年、四三頁；田澤晴子『吉野作造』、ミネルヴァ書房、平成一八年、二二、二五頁。

²² 吉野作藏「和歌四首」、『如蘭會雜誌』、明治二八年、一四頁；田澤晴子『吉野作造』、二二、二五頁。

²³ 翔天生「吉野作造「松風録」」、『如蘭會雜誌』、明治二八年、三五—三六頁；田澤晴子『吉野作造』、二二、二五頁。

²⁴ 『吉野作造選集一三』、岩波書店、平成八年、一三七、二七九、二九六—二九七、三一五頁。

²⁵ 『吉野作造「寶祚萬歳」』、『中央公論』、大正四年、公論一頁。

べきかの日本の所謂世界的使命を發揮したい²⁶。」西洋的＝普遍的潮流と日本君主制とが造作なく両立するという吉野作造の内政論に、首を傾げたのが上杉慎吉だった。上杉は、自分が民衆思いの君主の善政という限定的意味で用いていた「民本主義」概念が、済し崩し的にデモクラシー煽動に転用されるのではないかと恐れていた。上杉の親友で吉野とも交流のあった中田薫は、デモクラシーを日本の歴史に照らして肯定しつつも、日本ではそれは國體上の制約があると釘を刺していた²⁷。

浪人会も大きな社会変動に不安を懐いた団体の一つだった。浪人会は玄洋社・黒龍会系の団体で、一九〇八年に田中弘之の首唱で結成された。黒龍会は、日露戦争前の一九〇一年、欧米列強の中国大陆に脅威を感じて、「満洲」、「東三省」情勢調査を要求して発足した愛国主義団体だが²⁸、やがて内政上の問題にも積極的に発言するようになる。内田良平は、明治以来西洋崇拜が著しい日本で、デモクラシーや社会主義が急速に若者の心を捉え、「萬古不変の我國體」が動揺することを危惧していた²⁹。一九一八年八月二六日、寺内内閣批判を展開していた『大阪朝日新聞』の大西利夫記者が関西記者大会の報道で「白虹日を貫く」との表現をしたのに、浪人会は憤慨した。これは荊軻の秦王政(のち始皇帝)暗殺未遂事件に由来する、兵乱を予言する言葉である。朝日新聞編集部も印刷時にこの表現を不穩当と認識し、急遽輪転機を止めたが、すでに一万部弱が出荷され、完全には回収できなかった。やがて大西や編集人及発行人の山口信雄は大阪地検に新聞紙法違反容疑で起訴され、朝日新聞社には抗議の手紙が殺到し、遂には黒龍会員で皇国青年会を組織する池田弘壽が同志六人とステッキや棍棒を手に大阪に向かい、九月二八日に豊国神社一の鳥居前で朝日新聞社長村山龍平³⁰を襲い、人力車夫を殴り倒し、村山を衆人環視の中で燈籠に縛り付け、「國賊村山龍平ヲ天ニ代ツテ誅ス」なる紙旗を掲げる事件に発展した。一〇月九日、浪人会は日比谷松本楼で『大阪朝日新聞』不買を呼び掛ける集会を開き、神田基督教青年会館、次いで大阪でも二度演説会を開いた。朝日新聞社は村山社長ほか、鳥居赫雄(素川)、丸山幹治、大山郁夫、長谷川萬次郎(如是閑)ら論客が辞任し、大西や山口も有罪判決に控訴せず刑に服することになる³¹。

吉野作造はこの暴力沙汰に注目した。吉野は一九一八年十一月一日発行の『中央公論』に「言論自由の社會的壓迫を排す」という玉虫色の短文を掲載した³²。吉野は、言論の自由への圧迫が政府だけでなく「民間の頑迷なる階級」によっても行われているとし、浪人会の『大阪朝日新聞』攻撃を例に挙げた。吉野は一方で「朝日新聞の論調の何たるかは今暫く之を問題としない」と記事を不問に付

²⁶ 吉野作造「倒壊せんとする官僚主義の悩み」、『婦人公論』、大正八年一月、公論一三頁。

²⁷ 上杉慎吉「我が憲政の根本義」、『中央公論』、大正五年三月、公論一九一四六頁；中田薫「デモクラシーと我歴史」、『中央公論』、大正八年五月、公論二二二八頁。

²⁸ 「黒龍會創立趣旨」、『會報』(黒龍会)、明治三四年三月、二一三頁。

²⁹ 内田良平「我國體と民性」、『亞細亞時論』、大正八年一月、一三二〇頁。

³⁰ 伊勢神宮参詣の拠点田丸(三重県度会郡)にある「村山龍平記念館」では、昭和天皇から授与された勲一等瑞寶章の勲章と勲記、シルクハットや燕尾服、「万歳万歳万々歳」の掛軸が展示され、岡部子爵家から養継嗣を迎え、従四位に叙されるなど、近代日本のエリートだった村山の軌跡が描かれている(平成二九年六月四日見学)。

³¹ 馬場義續『我國に於ける最近の國家主義乃至國家社會主義運動に就て』(司法省調査課『司法研究』第一九輯報告書集一〇)(昭和一〇年)、二一六―二一九頁；『朝日新聞社史：大正・昭和戦前編』、朝日新聞社、平成三年、九三―九九頁；『村山龍平傳』、朝日新聞社、昭和二八年、五〇六―五二五頁。

³² 吉野作造「言論自由の社會的壓迫を排す」、『中央公論』、大正七年十一月、五一―五二頁。

しつつ、他方で「之に對して極端な手段を講ずるも或は恕すべき點がないでもなからう」とも述べている。また吉野は「國體冒瀆、朝憲紊亂」自体は問題視し、片言隻語を捉えて非難するのは大人げないものの、青筋を立て怒号し法廷に訴えることも有り得るとした。ただ吉野は、村山への暴力は「以ての外曲事」だとし、こう書いた。「各新聞では餘りの馬鹿氣た事として黙殺して居るのではあるまいかと思ふが、此頃東京市中に於ても所謂浪人會の朝日新聞攻撃の演說會が開かれて居る。試に之を傍聽するに、言辭甚だ不隱を極め、極端なる暴力的制裁の續行を暗示するにあらずやと思はるゝ節もあつた。傍聽者中此等攻撃の動機に就き忌はしい風聞を耳語する者あつたけれども、予輩は辯士中教養ある知名の紳士が之に加つて居る事から推して之を信じない。けれども斯くの如き形で言論に一種の壓迫を試みるのは決して喜ぶべき現象ではない。」この記事を読んだ浪人會関係者は、自分たちが暴力で言論を壓迫したと吉野が決めつけたことに憤慨した。吉野と浪人會との対決は、中欧諸國の君主制崩壊が報じられ、対独戦勝で朝野が沸き立つ一九一八年(大正七年)十一月の帝都東京で起きた。

二. 浪人會関係者の吉野作造訪問

一九一八年(大正七年)十一月二日、吉野作造は今井嘉幸から浪人會が来るとの警告を受けた。「此日今井君より注意あり 浪人會本夜集會し決議の上予を詰問に来るべしとなり 要は中央公論に掲げたる彼等の「言論の社会的壓迫」を難ぜるに激してなり」³³。

十一月五日午後一時、浪人會会員の佐々木安五郎、田中弘之、伊藤松雄、小川運平が本郷を訪れた。事前に小川が大学に電話を掛け、午後一時に吉野が来るとの話があつたので、一二時四〇分に大学に着いて応接室で待った。訪問を受けた吉野は、一時から三時まで講義だと答えた。四人が四〇分待つと、今度は吉野は三時から五時までも障りがあると言ひ出した。四人が夕方吉野邸を訪ねたいと述べると、吉野は今晚学生の集まりがあると断つた(實際当日の吉野日記には「夜來客多し」とある)。結局浪人會は吉野と、一六日正午から午後一時まで、本郷構内の山上御殿で面談するとの約束を取り付けた³⁴。

十一月六日、浪人會は山上御殿で吉野作造と次の点を巡り議論した。(一)浪人會の言論壓迫：浪人會は白虹事件を自分たちの所業ではないとし、浪人會が威嚇により言論を壓迫しているという吉野説の根拠を問うた。そこで、実は吉野が浪人會の演說會を聞きに行った親友の言を、恰も自分が目撃したかのように論じていたことが発覚し、しかも吉野が親友の聴いたのは自分が聴いたのと同じだと居直つたので、浪人會を一層憤慨させた。吉野がこの親友の名前を言おうかと述べると、佐々木はそれには及ばないと述べたが、吉野の方から今井嘉幸だと告白し、浪人會側は今井こそ『大阪朝日新聞』の弁護人ではないか、その言い分を鵜呑みにするのかと憤慨し、吉野は謝罪したという。(二)『大阪朝日新聞』の論調：浪人會が問題の根源を『大阪朝日新聞』の國體「呪詛」に見たのに対し、吉野は同記事を読んでいないとして賛否を述べず、自分は鳥居や大山と親しく彼らを信じているから非国家的記事があつたとは思えないとした。そこで浪人會は同記事の抜粋をその場で吉野に読ませたが、吉野は賛否を曖昧にし、ただ浪人會の言論壓迫のみを問題とした。(三)吉野の大学教育での民本主義鼓吹：浪人會は、吉野が最高学府で民本主義を説き、新奇なものに喜ぶ若者たちの前で、「歐米の所説」を引き、「群衆が暴君を殺す所の西洋史劇を演說し來る」と聞いたが、何と危ないこと

³³ 『吉野作造選集一四』、岩波書店、平成八年、一六六頁。

³⁴ 「訪問録」、六七—六八頁；「速記録」、特一〇—一一頁；『吉野作造選集一四』、一六七頁。

か、学生たちは「吉野先生の講義を聞ては、忠君なんて馬鹿らしい」と言っていると批判した。吉野は沈黙ののち、浪人会の演説を聞いた職工が村山を襲った例を引いて[浪人会こそ若者を煽動して暴力沙汰を起こさせている]と反論し、浪人会側は職工と自分たちとは無関係だと言い張った。(四) 吉野の安全: 吉野は、実は一箇月前に浪人会が自分を社会主義者だとして「始末せねばならぬ」と言っていると注意喚起してくれた人がいて、いまも学生十数人が窓の外で警戒しているような状況だが、「此は紳士として慚愧の至りです」と述べた。浪人会は、中央公論の件以前に吉野の名前が挙がったことはないから安心せよと言い、吉野も浪人会という恐ろしい名前だが「御運動の諸君の精神は分かりました」とした。(五) 立會演説会: 『大阪朝日新聞』の記事への見解を明示しない吉野に、浪人会は書面での見解を求め、吉野が多忙を理由に文書化を渋ると、浪人会は速記者を送ると文書化に固執した。吉野が「懇談」での解決を求めると、浪人会は四人揃って意見を聞くことを求めた。浪人会は改めて吉野に態度表明を求め、その上でなら「懇談」でも「立會演説」でも応じるとすると、吉野は「立會演説なんて私はソナナ喧嘩腰ではありません」と述べ、浪人会側が「イェ立會演説ほど文明的なものはありません」と返した。吉野は絶句したが、そこに入ってきた宮崎某[龍介か]が、吉野は緑会で用があると言い出した(対話打切を狙ったと考えられる)。浪人会側は「青年に餘り臆病風を吹きこんぢやイケませんヨ」と述べ、午後二時に自動車で行った³⁵。

三. 新聞報道を契機とする両者関係悪化

一九一八年(大正七年)十一月一日、浪人会会員たちは赤坂溜池の仮事務所に対応を協議した。この場で、吉野が伝聞情報で浪人会批判をしていたことに憤りの声が上がった。そこに『東京日日新聞』の記者が取材に来て、浪人会側は顛末を話したものの、吉野の返答を待っているので公表を差し止めるよう指示したというが、この経緯はのちに紛争の種となった³⁶。

一日夕方から浪人会の吉野作造訪問に関する報道が相次いだ。まず一日夕刊で『報知新聞』が、一日に浪人会が吉野から会見を「拒絶された」とし、一日に四人の「豪傑連」が吉野を責め、憂慮して学生が数十人集まったと報じた³⁷。また一日朝刊で『東京日日新聞』が、吉野が今井からの伝聞情報を自分の経験のように語ったことを責められて平謝りに謝ったので、浪人会側が気の毒に思って引き揚げたとし、また「自説は決して取消さない。自分が直接聞いたのでは無いと云ふのは夫れは枝葉の問題である。」と居直る吉野の言葉も掲載された³⁸。この記事は両当事者を憤らせた。吉野は自分が「謝った」と書かれたことに憤り、浪人会は吉野が自分のいい加減な議論を詫びたはずなのに、のちに新聞記者の前で「枝葉の問題」と語ったことに驚いたのである³⁹。

更に一日の『報知新聞』は、自分は謝っていないと主張する吉野が、「来る二十日(水曜日)帝大構内に學生數十名立會の公開の席上内田良平氏と討論し公明なる第三者の前に冷静なる批判を待つこととなった」と報じ、「帝大の學生等は團結して『學問の權威』『舊思想の撲滅』を絶叫して博士を聲援すべしとの意氣頗る昂つてゐる。」とした⁴⁰。浪人会は、吉野が傘下学生を聴衆とする帝大内で

³⁵ 「訪問録」、六八—七七頁; 「速記録」、特一一頁; 『吉野作造選集一四』、一六七頁。

³⁶ 「始末」、五九—六〇頁。

³⁷ 『報知新聞』、大正七年十一月一日夕刊、四頁。

³⁸ 『東京日日新聞』、大正七年十一月一日朝刊、七頁。

³⁹ 「始末」、六〇—六二頁。

⁴⁰ 『報知新聞』、大正七年十一月一日朝刊、七頁。

の立会演説会開催を一方的に発表し、内田を弁士に指名してきたことに驚いた。一八日に吉野の一七日付書簡が浪人会に届いたが、そこで吉野は『東京日日新聞』に書かれた「小生の態度に対する貴方の報告に聊か事実と遠かるもの有之」とし、「友人十数名の立合の上」で持論を述べたいとしていた。また吉野は佐々木、小川を忌避し、田中、伊藤のみに来てほしいと述べていた。加えて吉野は、これを機に「支那革命史の研究者」でもある内田に会いたいと書いていた。末尾で吉野は、浪人会訪問時の学生の無礼な振舞を「後で知り汗顔の至りに不耐候」と述べていた。一八日夕刻、浪人会は同日付の吉野書簡を受領し、『報知新聞』の報道に驚いた、自分が企画したのは「少数」の会合で、公開討論や学生の応援など考えていないが、「多分数十名の會衆とは相成可」と言いつつ、どこまでも「懇談」的に行きたいと弁明した。浪人会は予定参加者数が「十数名」、「少数」、「多分数十名」と目まぐるしく変わる吉野書簡に当惑した。浪人会は取り敢えず一九日に相談するとの返書を吉野に出した⁴¹。

浪人会は一九日に協議して同日書簡を送り、まず吉野作造に大阪朝日記事への賛否を至急郵送するよう求め、今井が浪人会の演説会で何を聞いたかについての照会結果を尋ね、その返答があれば懇談でも立会演説会でも応じるとした。吉野は「一九日夜」に返書を認め、翌日投函した(浪人会によると消印は二〇日午前一〇時、現地郵便局到着は午後一時、浪人会着は午後五時だというが、だとすると事実上、二〇日夕刻の演説会開催に関して浪人会と諒解を取り付ける意思がなかったと思われる)。ここで吉野は、今井の件は彼の上京を待つとし、大阪朝日の件は二〇日の会合で扱うとして、問いに一切答えなかった。吉野は、そもそも二〇日の会合は浪人会の提起したもので、[それに応じないのは]「紳士の徳義」を失うとした。浪人会は、彼らの問いには答えず、逆に彼らの「紳士の徳義」を問うてきた吉野への疑念を深めた⁴²。

四. 帝大内立会演説会という名の吉野独演会

一九一八年(大正七年)十一月二〇日午後六時、吉野作造は帝大第一控室で立会演説会を開催した。浪人会は現れず、学生が百人以上集まった。吉野曰く「夜六時より浪人会との交渉始末を報告す集るもの百余名、此日実には田中氏伊藤氏内田氏等を招待せしも来会なかりしに付き単独報告とせしなり」⁴³。この吉野の主張によると、浪人会の欠席は彼等の責任であるかのように読める。これに対し浪人会の主張によれば、吉野はいきなり大学内で学生を集めて自分に有利な状況での立会演説会を開催し、数時間前に招待状を手にした浪人会が来ないことを十分想定して、浪人会が来るのを怠ったと主張したことになる。実際の観客数も、「十数名」でも「少数」でも「数十名」でもなく、学生「百人余」だった。新聞各紙は吉野の主張通り、浪人会が勝手に欠席したと報じた。『東京日日新聞』によると、吉野は(16日の会見以外は浪人会の様子を実際に見たことのないまま)「私の觀たる浪人會は國體擁護の美名に隠れて其所爲の大半は國家に有害なる運動を試みる團體である支那革命の滿蒙問題等に容喙して一見憂國志士の如き行動に出づる事もあるがその行爲たるや全然暗黑的である」と断言した⁴⁴。浪人会は参加した一学生(あるいは浪人会が派遣した間諜だったのかもしれない)から当日の様子を次のように聞いた。「(一)學生があまりに居たので、四人の方で怖ぢけた云々。(二)四人

⁴¹ 「始末」、六二—六六頁。

⁴² 「始末」、六六—六九頁；「速記録」、特四四—四七頁。

⁴³ 『吉野作造選集一四』、一六七—一六八頁。

⁴⁴ 『東京日日新聞』、大正七年十一月二日朝刊、六頁。

は金曜日第一回[中略]には酒氣を帯びて來れり。(三)朝日の記事に對し賛否の返答を求むるは以て己れを引掛けんとする小策なり。去れど自分は夫れにはひつかゝらぬ。(四)浪人會は主觀的にはよいと思ふが、世間の誤解は客觀的にあり。今後の行動に注意せんことを望む。(五)田中、伊藤兩氏を望む。佐々木、小川兩氏は冷靜に理を論ずるの人にあらずと思ふ。故に必らずしも求めず。(六)吉野の話を開くと忠君愛國の念が起らぬといへるが、學問の講義では忠君云々は別に云へぬ。どの道聞く人の勝手に屬するのである。(七)私は學校の講義をして、之れを聞く學生が行爲をあやまる様なことがあれば、私は責任を受けるが、外に在て演説した時には其責は負はない。(八)日々の新聞記事は浪人會より原稿を送りたりと云々。又た日日の記事に付ては彼等に責任あり云々。私の會見では斯ういふ事があるから公開討論を欲するのである。(九)國體護持と云ふ事にケチをつけるのがいけぬと云ふ様な口氣が見える。危険思想はアー云ふ名目の下に行はるゝのが多い。されど國體擁護の精神はあつてもその方法と理論とが誤れば却て國を誤るのである[。](十)暴行者が内田氏と關係が無いと云ふ事は私は全然信じない。故に私は中央公論のあの記事は絶體に取消さない。(十一)浪人會四人の人達は私達は私を有力な位置にあるものゝ様に云はれて居るが、私はそんな有力な位置に居るものではない。」自分たちの不在をいいことに、吉野が學生を集めて浪人會を笑ひものにし、自分の都合のいい状況認識をしていると考えた浪人會は、吉野が論点のすり替えを出来ないよう直接質問を向け答えさせるには、立會演説会しかない結論付けた⁴⁵。

二一日の書簡で浪人會は吉野作造に立會演説会を申し込んだ。浪人會は、吉野が一方向的に立會演説会を開催したこと、当初立會演説会を忌避していた吉野が言を左右して突然それを開催したことを責め、「當方こそ貴下の紳士の徳義に對する信念に著しく動搖を來たし、最高學府の師表たるべき御人格の有無をすら疑念を挿むに至り候を遺憾と存じ候」と述べた。二二日に浪人會は立會演説会の場所を神田区表神保町の南明俱樂部と決定し、午後五時から開場とした。だが吉野の都合で、五時開場としつつも立會演説会自体は六時からとなった⁴⁶。

二二日の書簡で吉野作造は立會演説会開催を承知し、二つの条件を付けた。「一、公開の性質を徹底せしむるため朝日、日日、時事、報知の少くとも三つ以上の當日の朝刊に廣告御出し下さる事之れなくば公開の會合も私的のものとなるの萬一の恐あり、依りて明日の出席は一旦遠慮し、改めて時處方法等御協議仕度考に候。併し多分御異議有之間敷儀と信じ候。二、會場の取締等につきては申迄も無之候へども一切貴方に於て御責任を負われ度、又貴方側毎一回の御發言に對しては小生にも其都度發言の自由を與へられ度き事」。吉野は更に自分は「徒歩主義」なので遠方は避けるよう要望した。同日夕方この書簡を受け取った浪人會は吉野に返信し、『東京日日新聞』、『報知新聞』、『中央新聞』(政友会系)、『二六新報』(大衆紙)、『國民新聞』(徳富蘇峰系)に廣告を出す旨を通知した。『朝日新聞』は当事者であるために、『時事新聞』は以前浪人會の廣告を拒否したために、今回は廣告申込を見送ったという。加えて浪人會は、辻バラ五百枚、印刷チラシ五万枚を用意した。また浪人會は會場の「取締」について承知して、警察にも警備を依頼するとし、「御發言に就ては出来る限り御自由の儀取計らひ可申候」とした。その上で浪人會は、會場が表神保町(東大正門から徒歩三十分弱)になったので吉野に送迎の自動車を出すとし、また開始時間をやはり午後五時に出来ないかと尋ねた。二二日夜吉野から、他用のため時間繰り上げは困難と電話があった。二三日朝にも吉野から電話があり、当方の希望を容れてくれて感謝する、自動車は自分で用意し午後六時に赴くとの話

⁴⁵ 「始末」、六九一七一頁、『報知新聞』、大正七年十一月二日朝刊、九頁。

⁴⁶ 「始末」、七三—七四頁。

があった⁴⁷。

五. 南明俱樂部での立会演説会

一九一八年(大正七年)十一月二三日午後、東京帝国大学三十二番教室では東大法科緑会弁論部の臨時総会が行われ、学生が次々登壇した。「…諸君！ 然り行動である。我々のなすべきことは南明俱樂部に押しかけることである。この會場に燃ゆる、何物をも焼きつくす熱を以て、浪人會一派の暴虐を焼きつくすことである」「…浪人會一派は、吉野先生を葬ればデモクラシーは死滅するものとの錯覺を以て、夜となく晝となく、吉野先生の身邊に迫って、卑劣な行動を續けて居るのだ。」「昨日までデモクラシーの提灯持ちをしていた諸新聞と學者達は今何をして居るのか。先日の大阪朝日新聞破懷運動事件以來、浪人會一派の脅迫に會つて縮み上つてしまったのだ。彼等は一夜にして變節したのだ。我々の吉野先生のみは四面楚歌反動の嵐の中に敢然と戦つてゐる。」「浪人會對吉野先生の戦ひは、自由の學府が軍國主義の馬蹄に蹂躪されるか、民衆の手によつて擁護されるかの決戦だ」「一人残らず、南明俱樂部へ行かう。浪人會を葬れ！ 吉野先生を守れ！」⁴⁸。

吉野作造は氣勢を上げる学生たちとは別に行動し、午後から友人と一緒にいた。「午後よりいろ／＼友人来る 四時過鈴木文治君麻生久君古市晴彦君等と共に會館にゆき食事し五時半頃星島君の好意により自動車をも南明俱樂部にかかる 定刻前一杯になり屋外已に人の山を築く 辛うじて入場」⁴⁹。『時事新報』曰く「吉野博士は場外の群衆に迎へられて、入場脊廣服の瀟洒な姿が正面に現れると群衆から熱狂的の歡聲を浴びた」⁵⁰。なお吉野にこの日午後、外せない別件があった形跡はない。吉野と鈴木、麻生らとの食事は、演説会の事前打ち合わせだろう。だとすれば吉野が浪人會に開始時間を一時間遅らせるよう求めたのは、宮本武藏が佐々木小次郎を焦らせたように、一種の戦術だった可能性もある。

会場前では満員を宣言する警官に入場できない群衆が罵声を浴びせた。「あの野郎生意氣だ」「曳き摺り落ろせ。曳き摺り落ろせ」「戸をぶち破れ」「二階は未だから明きだ」「官憲横暴だ！ 曳き摺り落ろせ」。群衆は通りに溢れ、警官は市電を通過させるのにも苦労した⁵¹。

吉野作造が到着した時、南明俱樂部ではすでに一時間前から浪人會の葛生能久による状況説明が行われていた。浪人會の認識では、屋内の聴衆の七割は(吉野自らが動員したのではないにしても)吉野応援者で、屋外からは吉野派群衆の声が聞こえてきたが、浪人會側は自派の動員は行わなかったという。吉野の到着で、立会演説会が開始となった⁵²。

立会演説会と銘打ってはいるが、その実態は浪人會から吉野作造への公開質問だった。浪人會の弁士四人が別な質問をし、その都度吉野が答える形式である。四対一というのは吉野に不利だともいえるが、佐々木以外の弁士は一度の登壇だけで、吉野だけに何度も登壇の機会があるという形式は、吉野を当日の主人公にする効果を生んだとも言える。

⁴⁷ 「始末」、七四—七八頁。今回確認できた範囲では、下記新聞の十一月二三日朝刊に「國體問題立會演説會」の広告が出ている。『報知新聞』、七頁；『國民新聞』、六頁；『東京日日新聞』、五頁。

⁴⁸ 菊川忠雄『學生社會運動史』、四六—四八頁。

⁴⁹ 『吉野作造選集一四』、一六八頁。

⁵⁰ 『時事新報』、大正七年十一月二四日朝刊、七頁。

⁵¹ 麻生久『黎明』、新光社、大正一三年、二一六—二一七頁。

⁵² 「始末」、七八—七九頁。

最初に伊藤松雄が「帝大控室内に於ける吉野博士の演説に就て」と題して登壇した。伊藤は吉野個人への敬意を表明しつつ、(一)大阪朝日新聞の記事への吉野の態度を何度尋ねても返答がないので、それを明らかにするために本会を開いたと述べた。その上で伊藤は、帝大控室演説会で吉野が(二)大阪朝日への賛否というのは引っ掛けだから返答しないと述べたのは事実かと問い、また(三)佐々木、小川が冷静に理を論じる人ではないとはどういう意味かと問い、(四)学問と愛国とは別問題だと述べたそうだが、一五日の訪問時には自分が地方講演で、講演前には危険人物扱いされたのが、講演後には憂国の士として称賛されたという話をしていたではないかと問い、(五)東京日日の記事に不満を持ち、浪人会が原稿を送ったと事実無根の主張をする根拠は何かと問い、(六)浪人会が國體擁護と騒いでいるが、危険思想とはああいふ名目で行われるとの発言の真意を問い、(七)内田と村山社長に暴行した池田とは無関係だということを信じないのとはどういう意味でかと問い、(八)吉野は自分を有力者ではないというが、「吉野博士では苟も高等學府の教授であるから、最も有力な者である」。恐らく「御謙讓の意味から」そう言ったのだろうが、「尚吉野博士の御人格及び御位置の上から此の御尋ねをしたい」と述べた⁵³。

吉野作造曰く(一)「私は大阪朝日の記事に反対である」が、浪人会の「社會的言論壓迫」には反対する。朝日の当該記事に「不隱の文字と認める」が、朝日全体にどうとは言わない。浪人会は朝日への社会的制裁として「ボイコット」を呼び掛けているが、「私は「ボイコット」の意味では取つて居らない」。浪人会から抜書を渡されたが、それだけでは「何故に危険思想であるか、何故に國體を冒瀆するか」は判断できない。(三)佐々木、小川を軽蔑はしないが、伊藤、田中と話をしてみたい、勝とうというのではなく事理を明白にすればよく、両君が対話相手として適當である。(四)忠君愛国は聴く人の勝手だというのは誤聞で、自分は倫理学教師でないというだけである。数学を学んでも愛国心は起きず、自分も政治史講義で仏露革命などを扱うから、忠君愛国の念が起きないのは致し方ない。だが「私の講義を聴いて、忠君愛国と云ふやうな事は馬鹿らしいと云ふ感じを起す學生があつたならば、責任を負うかはどうかと云ふ御質問がありました、そう云ふ學生が若しあるとすれば私は立派に責任を受ける、願くばどう云ふ學生であるかその學生の名を指摘して戴きたい」。「不隱當」に解釈するのは自分の講義の「誤解」である。(五)浪人会が日日新聞に原稿を送ったというのは第三者から聞いた話だが、ハッキリとは言えない、ただ内輪の会合の内容が漏れたのは、浪人会が勝手に漏らしたからだと言っている。(六)「國體擁護と云ふことは非常に結構であるが、唯君の爲國の爲と號してやる事が、本統に國の爲に成るかどうかと云ふことが私の疑問とする所」である。朝日の記事も記者も不都合とは思ふが、非国民、非愛国者だと毎晩演説して歩くことは、益々日本国民の間に障壁を築く所以ではないか。一体浪人会は世界の変局に際して国民精神をどう擁護するかを聞きたい。(七)浪人会が暴力を鼓吹する団体でないことは田中の説明で「深く諒している」が、あの暴行者と内田氏との間に一種の精神的関係があった以上、村山襲撃事件への浪人会の「道德的責任」は免れない。「私の講義を聴いて居る學生、私の家に日夕出入するものが私の演説を聴き私の講義を聴いて、他へ行つて不都合をした時には、私が道德上の責任を負ふのが當然である。」(八)「最後に私が微力なる者と申しましたのに對して、微力ではないと御稱賛に預りまして何とも恐縮に存じます、自ら微力と思つて居りますけれども、自分の責任は何處迄も盡します、間違つた事は何時でも改める、自分の信ずる處は何處までも突進して行くと云ふ考であります。」なお吉野は(二)に関しては素通りした⁵⁴。

⁵³ 「速記録」、特一—五頁。

⁵⁴ 「速記録」、特五—九頁。

第二に小川運平が「新聞記事に就て」と題して登壇した。小川は、自分は感情家であっても道理の判断は誤らない、今日は感情を抑えるという話から始め、一六日の面談の描写に移った。小川は、(一)吉野が朝日の論調を正面から評価しようとしなかったことを責め、(二)二〇日に浪人会の行動が國體擁護の美名に隠れているが国家に有害だと言ったそうだが、その根拠は何かと問い、(三)憂国の士気取りでの支那革命滿蒙問題への容喙も暗黒的だ、彼らにはどういう財源があるのかと言ったそうだが、どういう意味で暗黒的なのか、吉野はどういう財源があるのか、(四)紳士である浪人会員が腕力の制裁を誇りとしているかのように語ったことを責め、野外で騒いでいる学生の振舞も腕力と変わらないではないか、あれが大学の誇りかと問うた⁵⁵。

吉野作造曰く(四)自分は浪人会が国家のために行動していることは知っているが、方法に疑いがある。なお浪人会がしばしば腕力を使うのを誇りとするというような表現は使った覚えがない。(三)暗黒云々は非難の言葉ではなく、内田良平や西原龜藏のように支那での活躍が日本国内でよく知られていない、つまり暗黒の中にいる者を緑会で呼んで講演してもらおうという話である。私や今井と朝日との金銭的關係を尋ねるなら、浪人会こそ自分の財源を明らかにすべきだ。(一)親友は大山だけで、長谷川や鳥居とは相当の交際があるが、「あの兩人共憂國の士であつて非愛國の不忠臣など」云ふ説が起る筈が無いと云ふことを確く信じて居りますから、恐らく不隱當の文字を使つた丈ではないか。」「今度村山翁に暴行を加へた池田氏のことも浪人會の説明を聽くと非常の不幸の境遇にある人が身命を賭してやつたことで、誠に壯烈な美德を持つて居る。斯う云ふ亂暴なことをあゝ云ふ人がやつたと云ふことに就ては壯烈の文字で多少吾々は之を恕するけれども、教育のある人がさう云ふことをやつては可けないと云ふのです。」言論の自由には相当の範囲があり、國體冒瀆や朝憲紊乱は許されないが、「ボイコット」で自滅を促すのはよいものの、暴力は許されていない。中央公論論文について、「尤も此論文を書いた時には、恐らく浪人會が鐵拳主義で行くのではないかと云ふ誤解を持つて居たからさう云ふ論文を書いたのですが、鐵拳政策でない」と云へば私は撤回します。併しながら私はあれ丈の事實があつた以上、此論文を草したと云ふことを取消す必要はないと認めます。」「浪人會の辯明を聽いて感謝の意を表します。而して此感謝の意が陳謝の意に成るならば私は明白に陳謝して居るのであります。」吉野は学生の威圧的態度については触れなかつた⁵⁶。

第三に佐々木安五郎が「言論壓迫及國體問題に就て」と題して登壇した。(一)佐々木は「言論壓迫の立會演説に既に言論壓迫が聽えてゐる」として、吉野を崇拜する学生たちの「吉野博士萬歳浪人會の馬鹿野郎」という声に苦言を呈し、誰がその責任を負うのかと問い、(二)吉野論文では自分が言論壓迫者にされているようだが、百二十万の読者、一千万円の資金を有する強大な朝日新聞を自分たち弱者がどう圧迫するというのか、朝日新聞こそ言論壓迫者だとして、南極探検の白瀨轟中尉を金力で通信員に取り込もうとした、所有地付近に開通予定の神阪直通電車の騒音を懸念した村山社長が、路線を山側に移して隧道を掘るよう求め、そうしなければ朝日新聞に同社を批判させると脅した、加州人バツターソンの飛行郵便で大儲けをする計画に大阪朝日が加担し、外国人に空から日本の地形調査ができる機会を与え軍事情報を脅かし、反対を封じようとした、朝日新聞の「水銀燈」欄で特定企業を攻撃しその経営を困難にし、大阪市民が反撥している等の事例を挙げ、朝日新聞の圧迫への正当防衛が理に適うことは法学博士なら認めるだろうと問うた。また佐々木は、(三)これほど大勢力の朝日新聞が、大阪の検事からも不穩當と指摘され、浪人会から非国民だと指摘されて、もはや反

⁵⁵ 「速記録」、特九—一四頁。

⁵⁶ 「速記録」、特一五—二〇頁。

駁もできないことを強調し、(四)吉野が朝日新聞の「白虹日を貫く」との文言を検討することなく浪人会のみを批判し、(五)しかも浪人会の言動を今井からの伝聞情報のみで批判し、その点に関する反省を拒んだことを責め、(六)伝聞情報をもたらした人物を、浪人会側は聞くに及ばずと言っているのに、自分から今井の名前を挙げたのは、友人に責任転嫁しようとしたからではないかと問い、(七)日本は君主君本(李氏朝鮮や清国)でも民主民本(共和政治)でもなく、君主民本である。天皇が民衆を慈父のように憐れんできたことは史書や御製にも見える。デモクラシーは人民が君主を道具にするもので、日本には合わない外国の制度であり、「デモクラセル」(でも暮らせる)程度のものだという。なお佐々木は、(八)吉野が呼ぼうとする西原龜藏は浪人会とは無関係だと指摘した⁵⁷。

吉野曰く(四)朝日の記事には、事実の説明に過ぎず革命鼓吹とは言えない部分と、不穏当な部分とがある。(二)佐々木の指摘するような問題が朝日新聞にあるのなら、私はそれを擁護はしない。正当防衛は学生時代から知っているが、それは法の許す範囲のことで、池田某のような暴力は許されず、浪人会にも法律上の責任はなくとも「思想上の聯結」はあるのではないかと、実力で人を制するのは「天皇陛下御一人」の権限である。(八)西原龜藏が浪人会と関係があるとは思っておらず、言葉が足りなかった。(五)自分が浪人会の講演会に行ったかの如き発言については詫びるが、友人を派遣して情報収集をすること自体は軽率ではない。(七)日本が君主民本で行くという方針に異論はない。「君主制は能く國が纏まると云ふことは東洋に於ては固より西洋の學者も明白に認めて居ります。如何にも君主制は好いものであるけれども、西洋では君主に成り手が無い。日本のやうに萬世一系の皇室を戴いて居る國では結構であるが、君主制が好いからと云つて袁世凱を君主にして行けるものではない。此點に於て君主制は作ることが出来ない。萬世一系の皇室を戴いて居ると云ふ點が日本の萬國に冠絶する國體を有する所以である。其事は屢々私が講堂に於て學生諸君に説いて居る點であります。唯佐々木君が常に憂慮せられました如く、最近に於て國民の思想が動搖して居ると云ふことは私も亦之を認める。而して其動搖を防衛すると云ふ點に於ては、私も佐々木君と同様憂を共にする。」ただデモクラシーは民主民本と同義ではなく、フランス流もあるがウィルソンのそれは意味が違う。「誤つたる民主主義の流入」もあるが、西洋の民本主義も正当な類型が入るならば日本の民本主義を助けるだろう。民主主義が対抗するのは君主主義ではなく官僚主義である。「田中先生」も私も普通選挙論者である。最後に吉野は、今回の件の発端は浪人会の違法な暴力だと繰り返した⁵⁸。

ここで佐々木安五郎は屋外にいる林静夫の報告を読み上げた。聴衆が屋外に溢れ、過半数は帝大学生と思われるが、内部の様子を伝達する者が二名おり【鈴木文治とされる⁵⁹】、いずれも吉野支持を明言し、吉野が浪人会をこう教育しているなどと不公平な経過報告をしている、官憲に通知して伝達止めさせるか、公平な伝達者を選ぶべきではないかというのである。吉野はこれに対して、自分はこの討論会に際して何ら「組織的行動」を取っておらず、学生から応援の申し出があったが「鬮肩の引倒しに成るから」と拒絶した。吉野曰く「吾黨と云ふものは無い。」ただ大学生に不穏の行動があるなら「私の不徳の罪」であり、「深くお詫び」するとした。佐々木は、一六日の大学訪問の際も学生が窓外に二十人ばかり集まり、そのときは吉野も紳士として慙愧に耐えないと詫びたのに、あとで新聞社に浪人会が学生を恐れブルブルしていたなどと語っていたことを指摘して、吉野の誠意を疑った。また佐々木は君主民本の自説を吉野が敷衍したのを「名譽」とし、普通選挙支持でも同意見であるこ

⁵⁷ 「速記録」、特二〇—三四頁。

⁵⁸ 「速記録」、特三五—三八頁。

⁵⁹ ねずまさし『日本現代史』、昭和四一年、一〇頁。

とを確認しつつ、ならば吉野が浪人会の國體擁護運動を不要とすることもあるまいとした。続いて内田良平が池田問題で登壇し、浪人会が國體擁護運動を始めたのは池田が暴力を振るった二週間後、双方は無関係だと主張した。ただ自分の家にいた学僕で、自分の思想を受容した池田が起こした事件だから、吉野が言う通り「徳義上の責任は私にある」と認めた⁶⁰。

最後に田中弘之が「紛訶顛末に就て」と題して登壇した。田中は強大な新聞を誰もが恐れている、その不正確、不公平な新聞報道が人々に迷惑を及ぼし、言論圧迫になっていると苦言を呈した。吉野との文通を担当したという田中は、事実関係を確認するためとして、一七日、一八日、一九日の吉野書簡、二一日の田中書簡を逐一読み上げ、(一)新聞が事実を不正確に伝えたとし、また(二)吉野が二〇日に勝手に帝大内で立会演説会を開き、浪人会を実検せずに批判記事を書いたことを非難した。「學者と云ふものは中々意地の悪いもので案外反省の徳の薄きものであると落膽して居るのである。」最後に田中は、列席の学生たちが吉野ばかりに喝采し、吉野に敬意を払う自分に拍手しないことを非難した⁶¹。

吉野作造は、自分は多忙のため十分対応できなかつたと弁明しつつ、こう述べた。(一)経緯について双方に誤解があったようだが、一六日の面談について(吉野が謝罪したという)情報が浪人会から東京日日新聞に出たはずで、不本意なので少数の他人に立会を求め再度面談を試みたのが、(二)報知新聞には立会演説会と「誤報」されてしまった。「さうして二十日の會合にはお出に成らなかつたので、諸君は缺席として缺席裁判をしたのではない。初めからお出でにならぬと云ふことならやめるけれども、遠方の友人に書面をやつて呼んで置いて誰も来ないと云つて斷はる譯には行きませぬから、今日迄の顛末を辯じやうと云ふので報告した次第であります。」吉野はこう弁論を締めくくった。「浪人會諸君が斯の如き盛大なる會合を催し、私の思ふ所を述べさせて戴いたことは深く感謝する所であります。之に依つても浪人會は極めて正式に規律ある行動をするものとして了解致しました。私は唯今の御説明で浪人會の辯明に多少服する所がある。浪人會の方でも希くば私の説明を諒せられむことを希望する。共に國家の前途を憂ふる點に就ては同じでありますから、私一個としては更に近き將來を期して國家に盡すべき所以に付て懇談を重ねたいと云ふ希望であります。」これに続き佐々木が付言し、最初の本郷での会見後すぐ報知新聞記者が現れたので、吉野かあるいは彼に同情する者が新聞を呼び込んだのかと疑ったが、同紙には我々が喧嘩腰だったかのように書かれてしまった、東京日日新聞に一六日に答えたのは自分で、吉野がすでに事情を話したと聞いたので自分側も話したのだが、前後の脈絡が十分表現されず、吉野が平謝りに謝ったとだけ書かれたので、確かに吉野には癪に障ただらうと述べた⁶²。

最後に田中弘之より浪人会と吉野作造との合意文が朗読された。「一、池田某の行動に關し内田良平君の辯明を聴き、吉野博士は浪人會の趣旨を言論壓迫から出でたるものに非ずと認む。一、吉野博士並に浪人會は尊嚴なる我國禮崇尚の下に益々君民一致の美德を發揮する爲め各其所信に従ひて努力すべき事に一致せり。」この報告は満場の拍手で迎えられ、佐々木の発声で天皇陛下万歳を三唱し、午後一〇時三〇分に散会となった⁶³。

なお学生側は討論中に次の出来事があったと主張する。「浪人會の某が登壇した。彼は何か辯明

⁶⁰ 「速記録」、特三八—四二頁；「場外所見」、一九三頁。

⁶¹ 「速記録」、特四二—五〇頁。

⁶² 「速記録」、特五〇—五三頁。

⁶³ 「速記録」、特五三頁；「始末」、五九—六〇頁。

したが、聴衆の一人が『ノー』と叫んだ。演壇の後ろから浪人會の一人が飛び出して、彌次をなぐつた。こんなことは、當時浪人會の常套手段であつたのだ。吉野氏は演壇に立つた。『今の暴行！ あれがいけないと云ふのだ。數萬語の演説よりも今の一つの事實である。これによつて今日の立會演説の是非曲直は批判せられたのだ。』聴衆は湧き返った。⁶⁴この大立ち回りの形跡は速記録にはない。新聞各紙の報道はみな短く、討論の内容を伝えず、その雰囲気しか伝えていないが、『萬朝報』にはこのような記述がある。「會場内では佐々木蒙古氏、田中舍身氏の演説に對し、吉野博士が答辯したり、辯駁したりするその度毎に拍手が雷のやうに起る、聴衆の多くは學生で、博士萬歳を叫ぶ、その學生中には帝大、一高などの柔道、劍道部の猛者連がゐた。博士を保護する爲だといふ、演壇は割合に静肅で秩序立つた論戦が續く、時々浪人會の連中に對して悪罵を放つ者があるので浪人會派の聴衆が遣り返す『殴れ』『遣付けろ』の聲が四方から起つて喧々囂々の幕を見せたが、大した事もなく散會したのは十一時近くであつた⁶⁵。」浪人會の場外所見には、聴衆は模範的で場内に暴力はなかつたと証言する有髯紳士や、浪人會も案外うまくやつたが、事實のままに書くと彼らが勢いづくから、浪人會敗北と書いておこうと語り合う新聞記者が出てくる⁶⁶。

帰宅した吉野は日記にこう記した。「六時より立會演説始る 伊藤小川佐々木田中の四君起ち其都度予も起ちて質問に答ふ 十分論駁し尽して相手を完膚なからしめし積りなり 十時過凱旋す 屋外同情者千数百 歩行自由ならず警吏の助により辛うじて電車に飛び乗り帰る 外套と帽子とを失くす」⁶⁷。

六. 後日談

吉野作造と浪人會とは暫く連絡を保った。一九一八年(大正七年)十一月二四日、吉野作造は浪人會に感謝状を送った。「何れにしても貴方に對する誤解は全然氷解今後は隨時驥尾に附して俱に國事に盡し度御了解被下度候」。浪人會も吉野の民本主義が君主ではなく官僚に對峙するものと知つて安堵し、二五日に感謝状を送った。一二月四日、吉野は書簡で今井の伝聞情報問題に関して九日か一〇日に浪人會・今井・吉野の三者會見を提案した。浪人會は佐々木が七日に返信し、中央公論の件は吉野が誤解を認めたのでもはや深く追究する必要はない、特別の場を設けるのではなく、本日午後二時から今井も發起人になっている鶴見総持寺の黃興建碑式に出席するので、そこに今井も吉野も来ないかと誘つた。だが総持寺には二人とも現れず、一日に吉野から返信があり、吉野は大阪出張で返事が遅れ、総持寺にも行けず、今井も「流行感冒」で「多分」欠席したとし、後日何かの機会に会うことが提案された⁶⁸。

その後浪人會は、一二月一〇日の『大阪新聞』に九日の吉野講演「戰役終熄の道德的意義」の記事を見つけた。「ロシアも人心の歸嚮する處に従つて共和國となり、獨逸も亦然り、今日我等は如何にするかに就て大なる迷ひの雲に閉ざされて居る。然るに浪人と云ふやうなものが藏の隅から古行燈を提げ出して日本國體擁護などと叫んで居る」。浪人會はこれを見て、演説會や文書での吉野

⁶⁴ 菊川忠雄『學生社會運動史』、五二頁。

⁶⁵ 『萬朝報』、大正七年十一月二四日朝刊、三頁。

⁶⁶ 「場外所見」、一九四、一九六頁。

⁶⁷ 『吉野作造選集一四』、一六八頁。

⁶⁸ 「始末」、八六—八八頁。

の発言が「全部虚偽」であったと結論付けた⁶⁹。

黒龍会系雑誌『亞細亞時論』では、その後も吉野作造批判が提起された。一九一九年一月、福田徳三が吉野作造支援の目的でエリート知識人団体「黎明會」を発足させると、同誌は浪人会の「國體擁護運動」への攻撃だとすぐに反応した。同誌は、一方で吉野らがキリスト教理念などを「學理的」などと呼んで「我が國體に牽強付會させやう」としているとし、吉野、今井を「輕佻淺薄」と評しているが、他方で福田を「ハキ / \ と齒切の好い感じのする」、左右田喜一郎を「重厚冷靜」と評しており、双方の分断を図った可能性がある⁷⁰。同年末朝鮮獨立運動の指導者呂運享が極秘裡に來日した際には、吉野主宰で呂の新人會講演會が開かれたと聞いて、同誌は「國法を破る不都合不謹慎な行爲」だと非難した⁷¹。次の文章も、森戸事件に抗議した吉野らの揶揄だろう。「此頃學者どもが官憲から一寸叱られると、直ぐ學問の獨立々と仰々しく騒ぎ立てゝ居るが一體全體學問の獨立と云ふことは、言ひたか言ひの出放題や、猿のやうに物眞似して歐米人の言行は何んでも新し何でも善しと饒舌り散らし、受賣りすることではない。學問とは天地の眞理を闡明し、其の國土民族に適應すべき道を興すのを云ふのである。今の日本の學者達に獨創的學問を啓いた者が果して幾人あるか、唯の一人も無いではないか。[...] 猿が如何に物眞似しても人間には及ばない。物眞似ばかりでは歐米に追いつくことは思ひもよらぬことだ。だから猿學者どもは猿芝居の活辯へ轉職させて、飯櫃だけは空にせぬやうにしてやり、日本帝國の學府は宜しく國土民族に適合した學問を興すべきである。是れこそ眞の學問の獨立である。／猿の物眞似を學者の任務と心得たり、自國の國體を呪ふやうな言論を擅にするのを學問の獨立とか思想の自由とか心得て居る徒輩は、噫これ遂に是れ人に三本毛の足らない猿。宜しく人間界をさるべし。去つて正に畜生界に行け。喝⁷²。」

本郷教会の雑誌『新人』は、一九一八年一二月に南明俱樂部の立會演説會を吉野作造の勝利として総括した。「IA生」なる著者は、「時代の思潮」、「世界の大勢」に疎い「忠君愛國の志士」を笑ひ、演説會に向かった吉野をヴォルムス帝國議會（一五二一年）に向かったマルティン・ルターに準えた。「IA生」は理路整然たる吉野に浪人會が色を失ったとし、演説會が吉野博士万歳の声で溢れたことを「近來の痛快事」と呼んで、こう締め括った。「日本は日本の日本にして又世界の日本だ⁷³。」

浪人會と吉野作造とが再び対決することはなかったようだが⁷⁴、一九一九年（大正八年）一月一六日に本郷追分の大学青年會館で、海老名彈正と「皇國青年團」との間で行われた立會演説會は、その代理戦争だった可能性がある。これは『新人』前年十一月号の海老名論文「超國家の權力」について、國家以上の權力を認めた國體違反の主張だと批判を「皇國青年團」が提起したのが契機だという。この経緯を『新人』で紹介する「茶目生」は議論の帰趨を明言しておらず、吉野の場合のように海老名の大勝利とは書いていないので、あるいは「皇國青年團」に有利な展開になっていたのかもしれない

⁶⁹ 「始末」、八九—九〇頁。

⁷⁰ 冰山生「黎明會演説會を評す」、『亞細亞時論』、大正八年二月、六八—七四頁。

⁷¹ 鷗公「時評：呂運享事件」、『亞細亞時論』、大正九年一月、一五—一六頁。

⁷² 居候堂「新畿り草：學問の獨立？」、『亞細亞時論』、大正九年三月、五一—五二頁。

⁷³ IA生「吉野作造と浪人會演説」、『新人』、大正七年一二月、一一—一頁。

⁷⁴ 浪人會は『日本及日本人』とは再び紛争になっている（葛生能久「日本及日本人」誌の浪人會に對する名譽毀損事件解決の顛末」、『亞細亞時論』、大正八年一〇月、四九—七一頁。）浪人會がもう吉野に直接手を出さなかったのは、立會演説會での経験から面倒を感じたのかもしれないし、黎明會の存在を警戒したのかもしれない。

75。

一九二六年(大正一五年)八月、吉野作造は「立合演説」なる小文でこの事件を回顧している。この文章で吉野は、最初に立会演説会の開催を持ち掛けたのは自分で、双方から二、三十人の新聞雑誌記者を呼んで、学士会館で双方の言い分を聞いてもらってはどうかと提案したが、浪人会の希望で「あの騒々しい大集會」となると主張した。吉野は、「古代希臘の市民」なら街頭での政談にも慣れており、「現代では英米人が比較的にも最もよくこの方面の訓練を積んで居る」、彼らなら熱狂しても陶醉はしないが、「我國などではまだ / \ この方法では駄目」で、立会演説会をするなら「少数の識者」に聴衆を限定すべきだと述べている。この時吉野は、他ならぬ自分が、陶醉した学生たちから後援されていたということをどう思っていたのだろうか⁷⁶。

結論 吉野作造研究の脱魔術化⁷⁷

現存史料を見る限り、浪人会对吉野作造の立会演説会を、吉野の一方的勝利と総括することはできない。(一)この事件の背景にあるのはエリート対非エリートの確執である。両者の論争を主導したのは浪人会で、その論点はデモクラシーではなく吉野の言論姿勢であった。第一次世界戦争終結の世界変動を背景に、「學理」の名で西欧主義を宣教する「東京帝國大學法科大学教授、法學博士」の態度が、日本主義に傾斜する民間言論人には横柄で誠実でないとの印象を与えたのである。この演説会で浪人会は、その指摘する問題点を概ね吉野に認めさせた。浪人会の攻勢に吉野は消極的に対応し、浪人会の威圧的姿勢への批判は止めなかったが、浪人会を追い詰める積極的準備はしなかった。なお和解するために、双方が報道機関の「誤報」に責任転嫁するという行動様式も見られた。(二)この立会演説会は君主民本の同志間の意見交換でもあった。浪人会の愛国心を認め、天皇陛下万歳で閉会したことは、吉野にとって不本意な妥協だったというわけではない。吉野日記の記述に敗北感がないのは、事態を自分に都合よく解釈し、また聴衆の加勢に気をよくした面もあるだろうが、結論に不満がなかったのも一因だろう。(三)両者は共に言論で勝負しようとしたが、共に公正さを欠いていた。池田が内田の子分である以上、彼の村山への暴力が浪人会と無関係だとは言い難く、また浪人会の反知性主義的な行動様式には、彼ら自身が否定してもやはり威嚇的側面があった。これに対し吉野も、浪人会が参加しがたい状況で学生相手の帝大内立会演説会を開催したり、当人のいない場で浪人会を一方的に批判したり、自分の虚言に居直ったりしたため、浪人会に公の場へ引き摺り出されることになった。後進国日本の知的エリートを負負する吉野の態度は、民間政治団体の浪人会からは傲慢に見えた。また吉野支援のために大挙集結した学生の威圧的・暴力的態度は、浪人会の討論者への圧力となった。吉野は演説会の場で浪人会に学生の振舞を詫び、後年彼らのことを議論の邪魔だったかのように評しているが、それでいて学生の動きを十分予想しており、当日も追い風として利用していたと言える。館外の参集者に内部の様子を伝達した吉野鼻眞の仲介者が、同日の開会直前まで吉野と一緒にいた同郷人の鈴木文治だったとすれば、吉野は聴衆の興奮を煽る戦略に出たと言われても仕方あるまい。(四)当時の新聞報道は小さい紙面で専らその場の印象を伝えたため、

⁷⁵ 茶目生「國體問題立會演説會」、『新人』、大正八年二月、六七頁。

⁷⁶ 吉野作造「立合演説」、『閑談の閑談』(書物展望社、昭和八年)、三四九—三五二頁。

⁷⁷ この表題は以下の論文を意識している。安藤英治「ウェーバー研究のエントツァウベルング——素顔のウェーバー」、『思想』、昭和四六年二月、三八—五九頁。

討論内容よりも吉野の容姿や学生の熱狂が注目されることになった。日本近代史研究者は、報道された印象論、吉野側の自己主張を越えて、この事件について探求することを百年に亙り避けてきた。

本論は、吉野作造研究の現状に再考を促す一つの契機となるだろう。松尾尊兌、松本三之介、三谷太一郎以来、吉野研究者はマルクス主義史学の「ブルジョワ」吉野批判に対抗しつつ、吉野を日本内発の民主主義者として従容典雅に描いてきた⁷⁸。時には自分の期待を投影し、吉野を天皇制に抵抗した英雄だと称揚する意見まで現れた⁷⁹。こうした論調は、冷戦終焉によるマルクス主義の凋落、『吉野作造選集』の刊行、「吉野作造記念館」（宮城県古川）の創設によって定着し、近年では憲政論文百周年（二〇一六年）を記念する『吉野作造政治史講義』刊行を機に再演された。だが「日本国憲法の間接的起草者」鈴木安藏への吉野の薫陶を描き⁸⁰、吉野の満洲事変批判を強調して、彼の「東洋モンロー主義」を精査せず⁸¹、吉野はポピュリズム批判の先駆者だ、「不十分なデモクラット」などではないと擁護し⁸²、吉野とその女婿で、帝大新人会創設者から大政翼賛会企画部長となった赤松克

⁷⁸ 松尾尊兌『大正デモクラシー』；松本三之介「民本主義の歴史的形成」、『年報政治学』、第八号（昭和三年）、一〇九—一三一頁；三谷太一郎『新版大正デモクラシー論』、東京大学出版会、昭和七年。

⁷⁹ 坂本義和「私の吉野作造観」、『吉野作造通信』第一三号（平成二三年）、一—三頁；坂野潤治「天皇制と共産主義に抗して」、吉野作造『吉野作造選集3 大戦から戦後への国内政治』（岩波書店、平成七年）、三五九—三八四頁。

⁸⁰ 「日本国憲法の誕生と吉野作造」（吉野作造記念館戦後七十年企画展）；金子勝「日本国憲法の間接的起草者・鈴木安藏氏——吉野作造氏の教導ありて」、『吉野作造研究』、第一二号（平成二八年）、一—九頁。ちなみに鈴木安藏は、戦争中には「八紘一宇の大理想を以て、皇道を全世界全人類に宣布・確立する」ことを唱道していた人物だが（鈴木安藏『日本政治の規準』、東洋経済新報社出版部、昭和一六年、三五三—三五四頁）、その点は顧慮しなくてもよいのだろうか。

⁸¹ 松尾尊兌「満洲事変下の吉野作造」、富坂キリスト教センター編『大正デモクラシー・天皇制・キリスト教』、新教出版社、平成一三年、三二九—三七二頁。吉野曰く「我々は過去に於て如何に甚しく西力東漸の勢に脅かされて常に不安な生活を送ったか。一たび歩をあやまれば奴隸的惨状につき落とされる、儻に對立の地位を維持し得ても彼等の弛まない壓迫の手は我々を無用の努力に狂奔せしめてその精魂を枯渇せしめずんばやまなかつた。東洋の平和と東洋人の幸福とは西力の不當壓迫の排撃よりはじまるとは近代史の明證するところ、永く翹望して而も容易に期し得なかつたものだ。それが極東に関する限り満洲國問題を機縁として確立の端緒がひらいたのだから嬉しい。」（『吉野作造』「東洋モンロー主義の確立」、『中央公論』、昭和七年一二月、本欄一頁。）

⁸² 荻部直「解釈改憲としてのデモクラシーとポピュリズムへの警鐘」、『中央公論』、平成二八年一月、一〇四—一一一頁。筆者は、「ポピュリズム」とは「国民」、「民衆」、「人民」、「大衆」の側に立つと自称し、その社会のエリートへの反感を喚起する政治運動のことだと定義しているので、吉野作造は大正期の代表的ポピュリストだったと考えている。本文でも見たように、吉野には確かに一方で「国民」、「民衆」、「人民」、「大衆」側と一体化せず、一定の距離を置くような行動様式も見られるが、他方で「官僚」、「軍閥」、「元老」、「財閥」、「民間の頑迷なる階級」等の戯画を描き、天皇と国民との直接親和性を強調して彼ら中間勢力を攻撃し、臨機応変の善悪二元論で国際政治を単純化し、以て大衆を興奮させデモクラシーを謳歌するという行動様式も見られるので、やはり吉野自身が「ポピュリズム」を推進した面もあると筆者は考えている。前者の面のみに興味がある荻部は、「ポピュリズム」の攻撃対象となるエリートとして専ら知識人を念頭に置き、大衆（「多数」）が興奮して知識人（「個人」）を抑圧する現象を危惧しているが、そもそも感情的な「多数」と理性的な「個人」という二項対立論も、エリート主義的な先入観だと言える。

麿との関係を「訣別」と説き⁸³、吉野を「戦前日本の良心」、「戦後日本の平和主義の源流」と絶讃するのは⁸⁴、歴史学的観点から本当に適切だろうか。かつて伊藤隆、有馬学は、松尾尊兌、三谷太一郎らの「大正デモクラシー」観を批判しつつ、左右対立では割り切れない「革新」派の概念を提唱し、吉野や新人会、黎明会に注目していた⁸⁵。また松本健一も述べている。「大川周明を国家主義者と名づけ、吉野作造を民主主義者(民本主義者)とよんで、その対立の図式に安住しているようでは、思想史を語る資格はない⁸⁶。」戦後の思考枠組で近代日本を割り切るのではなく、当時の文脈に即して観察するとき、吉野対浪人会の対決は勸善懲惡の三文オペラとしては描けなくなる。吉野作造研究

⁸³ 五百旗頭薫／宇野重規／伏見岳人「見えてきた新しい吉野作造」、『中央公論』、平成二八年二月、一四二、一四七頁(五百旗頭の発言部分)。この五百旗頭薫の発言は三谷太一郎の学説を意識したものだろう(三谷太一郎「解説」、同編『吉野作造論集』、中央公論社、昭和五〇年、三四二―三四四頁。)。だが赤松は死の床にある吉野から遺言を聞き、戦後に至るまで吉野顕彰運動を率いた人物で、二人が関係を絶ったことは一度もなく、「訣別」などしていない。赤松は新人会を経て日本労働総同盟、日本共産党に参加し、大正一五年には吉野が後援した社会民衆党の結成に加わり、吉野の身代わりで総選挙(昭和三年)に出て落選した。昭和七年四月、社会民衆党内で赤松ら「国民社会主義」派と正統派とが対立した際、確かに吉野は正統派を支援して社会大衆党結成を後押しし、赤松が議会制度を批判し現役軍人と連携するのを危険とした。だがその吉野自身も軍人を一概に拒絶してはおらず、寧ろ予てから大いに期待する面があった。また吉野が「国民社会主義」と徹底して対決したという認識は、いまだ浮遊している「国民社会主義」の正体を慎重に見極めようとするなかで、「共産主義」やファシズムと区別される限りではそれを擁護しようとしている面があり、議会制度維持にも固執はしていないという吉野の晩年の曖昧さを見落としている。吉野は死の前年、社会大衆党の結党大会(昭和七年七月二五日)に先立って赤松の国民社会党(「日本國家社會黨」)の結党大会(同年五月二九日)にも足を運び、赤松の主張については「書いてることは正しい 同感される 題のつけ方が下手だ」、「予はその主義に文句があるのではない」として本質的に同意している。なお赤松克麿の婦人運動家の妻赤松明子(吉野の次女)は、社会民衆党から分離した「國家社會主義婦人同盟」を指導している(神田文人「赤松克麿」、『國史大辭典』第一卷、吉川弘文館、昭和五四年、六九―七〇頁;『吉野作造選集一五』、岩波書店、平成八年、三一―九、三六九、三七七、三九二、四〇六頁;馬場義續『我國に於ける最近の國家主義乃至國家社會主義運動に就て』、四五―四七頁;吉野作造「國民社會主義運動の史的検討」、『國家學會雜誌』、昭和七年二月、一三〇―一四四頁;翔天生【吉野作造「文武兩官の氣風」、『新人』第六卷第一号(明治三八年)、五〇―五一頁;【吉野作造】「在郷軍人會に對する期待」、『中央公論』、昭和三五年一〇月、本欄一頁。)。

⁸⁴ 伏見岳人「現代によみがえる吉野作造」、『中央公論』、平成二八年三月、一二一、一三二頁。

⁸⁵ 有馬学／伊藤隆「書評:松尾尊兌『大正デモクラシー』/鹿野政直『大正デモクラシーの底流』/金原左門『大正期の政党と国民』/三谷太一郎『大正デモクラシー論』」、『史學雜誌』、昭和五〇年三月、六〇―七二頁;伊藤隆『大正期「革新」派の成立』、塙書房、昭和五三年、一〇―九七頁。

⁸⁶ 松本健一「大正デモクラシーから昭和ファシズム革命へ」、『吉野作造選集(第五卷)月報六』(岩波書店、平成七年)、二―三頁。大川周明は、東京帝国大学で試みた法学博士号の取得が難航した際、吉野の後援によりそれを達成した人物である(赤松克麿「人道の戦士、吉野作造」、同編『故吉野作造博士を語る』、中央公論社、昭和九年、一八五―一八六頁)。なお吉野は、「大阪の國粹會幹事」笹川良一のことも、「あんな類の青年には是非御面會を願ひたいと思ふのです」と後藤新平に推薦している(後藤新平宛吉野作造書簡(大正一三年一二月二三日発信地不明)、後藤新平文書(国会図書館憲政資料室))。

にいま必要なのは、マックス・ヴェーバー研究におけるモムゼン・ショックだろう⁸⁷。

⁸⁷ マックス・ヴェーバー研究におけるヴォルフガング・J・モムゼン『マックス・ヴェーバーとドイツ政治』(Wolfgang J. Mommsen, *Max Weber und die deutsche Politik*, Tübingen: Mohr, 1959.)の画期性は、(一)学問的著作を中心に見られがちなヴェーバーの思想を、ドイツ政治の観点から見直したこと、(二)ヴェーバーの人生を彼の自己申告を踏襲して描くのではなく、ドイツ史全体の文脈において相対化したことにある。吉野作造研究の場合、(一)日本政治の観点での分析は再三行われてきたが、吉野の学問的成果の批判的検討は不十分で、『政治史講義』にも過剰な讃辞が相次いでいる。(二)吉野の歴史的相対化は決定的に不足している。伊藤、有馬、松本らの問題提起を、松本、松尾、三谷以降の吉野研究者が消化できず、「吉野作造研究＝戦後民主主義の価値観からの吉野顕彰運動」という傾向を払拭できないでいる。伊藤らと三谷らとの立場の相違は、つまるところ(一般に戦後民主主義の対極にあるとされる)浪人会、赤松克麿、大川周明、笹川良一らを、(今日では一般に戦後民主主義の元祖と顕彰される)吉野らと対等の論争主体として認める用意があるか、また両者の思想的重複を認識する気があるかという点に起因している。

The Debate between Sakuzō Yoshino and the Rōninkai: An Analysis of the Argument from the Beginning to the End

Department of European Studies
Division of German Studies
Hajime Konno

The circumstances of the debate between Sakuzō Yoshino on one side and the Rōninkai on the other on 23 November 1918, have not yet been examined in historical research. Existing scholarship depicts the debate only using evidence originating from Yoshino and his bloc and does not explain the views of the Rōninkai. In this paper, using various testimonies regarding the event, I show the following: (1) The debate was led by the Rōninkai, and its topic was Yoshino's attitude, as shown in his statements. The Rōninkai aimed to show through Yoshino's confession in a public setting that his statements were untrue and that the article he published in *The Asahi Shimbun* was thoughtless. They were largely successful in their endeavour. However, Yoshino did not back down from his criticism of the coerciveness of the Rōninkai. (2) This debate was an exchange of opinions that was based on the common understanding that monarchy and democracy can coexist. There is no evidence of a sense of defeat in Yoshino's diary—apparently because he interpreted the meeting in his own self-centred way and because he was not dissatisfied with the juncture at which the argument ended. (3) The behaviour of the Rōninkai was always threatening. This can be seen in their attack on Ryōhei Murayama. Further, Yoshino did not sincerely respond to the Rōninkai, and the presence of the students who came to support him caused the debate to be a high-pressure one. (4) Because newspaper reports only published short reports on their impressions of the meeting, they highlighted Yoshino's appearance and the enthusiasm of the students instead of the content of the debate.